



私は大学2年次の冬から図書館のアルバイトを始めました。昨年度の卒業生の代わりに入ってきた新しい仲間と一緒に働いています。ここで私が担当している図書館の仕事を少し説明しましょう。

図書館カウンターに座って、貸出（延長）・返却、書庫への入庫などの手続きをしたり、閲覧室・書庫で本を配架する仕事をしています。また、蔵書検索で本の所在を調べたとき、しかるべき場所にあるべき本があるように図書館全体の本の並びを整える配架規制という仕事もしています。第5閲覧室には、英語の多読用の本があり、貸出・返却が大変多くて本の並びが乱れやすいので、春休みに配架規制を行いました。新学期が始まり、多くの人が熱心に第5閲覧室を利用されている姿を見ると嬉しくなります。

アルバイトを始めたことで私は図書館の活用方法がより一層広げられたことを実感しています。また、図書館でアルバイトをしている仲間がいろいろな本の役に立つ情報を教えてくれることもあります。図書館閉館の直前まで勉強している人や日曜の特別開館日にも図書館を利用して、頑張っている人の学生生活を垣間見ることができ、自分も頑張らないといけないなど、大いに刺激を受けます。自分を顧みる機会があ



今泉 慶美

ることは図書館でアルバイトをしてよかった、と思うことの一つです。

仕事の中では書庫での配架が好きです。図書館には新しい本が頻繁に購入されていて、古い本ばかりがあるわけではありません。私は新しい本も古い本もどちらの匂いも好きなのですが、特に古い本の匂いが好きです。アルバイトを始めて歩き回るようになった書庫ですが、年季を感じる本が多くありとてもいい匂いに浸れます。

書庫の本を開くと古いメモが挟まれていることがあります。昔の誰かがこの本の、私が見ているこのページを見たのかと思うと嬉しくなります。図書館の本は大学の財産だと言えるでしょう。でもそれは、金銭的なものではなく一冊の本とそれを読んだ人がいたからこそ、見えない誰かとの共有に価値があるものだと思います。56万冊を超える本を収容する図書館は、本に触れた人たちの息吹が漂っている目に見えない世界も大切に保管しているのではないかと思います。

図書館を利用する人は学生だけではなく、一般の方や他大学、卒業生、研究者の方々など多くの人たちも図書館を利用し、本を必要としています。私は図書館のアルバイトを通して、本に関して今までにないほどの深い感動を覚えました。図書館を誇りに思い、さらに大学をいつまでも誇りに思います。

いまいずみ よしみ（国際教養学科3年次生）

